



D1004の正面

正面からサラネット越しに上から175DLH、130Aが2本、バスレフポートが透けて見える



D1004の内部

内部はとてもシンプルな作りになっており、バスレフポートも意外と小さい事がわかる。また、内部の吸音材はハンヤのようなタイプが採用されている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。今号では前号に続き、マッキントッシュの珍しい初期モデルを紹介していこう。

第25回 JBL James.B.Lansing.Inc.

この会社の成り立ちは1927年に J.B.ランシングとケンテッカーによって設立された Lansing Manufacturing Company であり、当初はラジオ用のスピーカーをメインに生産していた。その後はアメリカ国内の映画産業の発展と共に映画用のサウンドシステムの開発に力を注いでいく。当時、彼らが開発したシステムは音質の良さと高く評価されており、1941年頃に映画音響機器の最大手である Altec 社と合併して J.B.ランシングはスピーカー開発部門の副社長となり、多くの製品を開発していく。その後1946年に独立した J.B.ランシングによって米国カリフォルニアに設立された会社が James.B.Lansing.Inc であり、JBLの3文字はその頭文字である事は良く知られている。JBL社 はランシングの死後もその製品作りのポリシーが高く受け継がれ、その後の他社の音響製品にも多くの影響を与えることとなる。特に1950年代初期に開発されたモデルは現在も価値が高く評価されている。

本文 / 田中伊佐資
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)
取材協力 / サウンドクリエイト

D1004

JBL社が初めて開発した家庭用の最高級大型システムで、コーナータイプの箱に38cm ウーファーが2本とホーン型1インチドライバー、N1200 ネットワークが搭載された2wayシステム。またこのモデルは仕上げの違いで マホガニー仕上げのD1004の他に D1005 (プロントコーナ仕上げ)、D1006 (グレー仕上げ)が存在している。1950~51年に生産された最初期モデルのみ H1000 / 8セルマルチセルラールーナーが採用されているが、1952~55年まで生産された後期型は蜂の巣タイプのホーンに変更になる。この後期型の頃からモデルのラインアップも多くなり C ナンバーの付くモデル名となり、この D1004 もC33 という型番となる。



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

JBL James.B.Lansing.Inc.



175-DLH

正面から見るとハチの巣のようなデフューザーを持つホーンに1インチの 175 ドライバーが組み合わされている。上記の 130A と同じ時期に開発され、その後の JBL の1インチホーンドライバーの原型となる。このドライバーユニットも初期型のグレー塗装シングネチャータイプのダイアフラムは薄く軽い。高域特性の反応は速くJBLの2wayシステムには欠かせないユニットとなる。振動板はとても薄いため、デリケートな扱いが必要となり、175が開発された1950年代の初め頃は10~15W出力クラスのアンプが主流なので問題なかったが、その後のステレオ時代の50Wを超えるハイパワーアンプでは入力を入れすぎてダイアフラムを破損してしまうケースもあった。



130A

1947~48年頃に開発され JBL を代表するフルレンジの D130 と同時期に開発された銅巻きのボイスコイルを持つウーファータップのユニット。フレームとマグネットの厚みが薄い独特の設計のため、キャビネットのバックスペースに制約が少なく、多様なデザインのキャビネットに搭載が可能。高性能ユニットとしてJBLの定番的なモデルとなり、その後も長くこれと同じようなユニットデザインの38cmユニットが生産された。特に初期のフレームがグレーのシングネチャータイプは継ぎ目のない薄く軽い1枚コーンの振動板が搭載されていて、音の反応が早く輪郭の深い音質で定評がある。



N-1200

1,200Hz のクロスオーバーで初期のグレー塗装のシングネチャータイプには3ポジションのみの切り替えスイッチが付いている。ボックスの中はコイルやコンデンサーがピッチでしっかりと固定され、後期のN1200と比べると2倍近い重量がある。

JBL は最初機のタイプのシステムのみ本体に直にプリントされた J.B.Lansing が描かれている



この連載の取材では初めてのことで、銀座に向かったのだ。行き先はサウンドクリエイト。このオーディオ・ショップは新型機種以外にビンテージ商品もかなり充実している。今回のテーマである JBL の D1004 が同様に納品されたため、取材に向うことにした。海に近い小田原の試聴室へドライバーがてら行くのもいいけど、銀座もまたいい。単に田舎者が気圧されているというところではないのだが、製品の格調がいつそう高まるように感じられる。貫禄ある D1004 がいつそう神秘的。

本機は50年代のモノラル期に誕生したスピーカーなので、1台ずつ作られ売られていた。程度が良好で同時期の個体がこうしてペアで揃うことは奇蹟的なことだ。スピーカーはセットで売られているのが当たり前になっていく感覚からすると、そのありがたみを感じにくいく。だからいったいどれだけ苦労して探しまくったかを、アトリエJe-tee の岡田さんは言いたくない。実際は言いませんが……。

1曲目はダイアナ・クラールの『ライヴ・イン・パリ』。これがほんまに還暦を迎えたスピーカーかというほどに若々しく浸透力がある音。ビンテージといえば聞こえがいいが、旧型といえは旧型である。ダイアナの声は、高域があるところでストーンと落ちて、鼻が詰まったよ

還暦を迎えたとは思えない
若々しく浸透力のあるモデル

うに丸くなってもいいはずだ。2ウェイでも高域はトゥイーターではなくドライバーだからナブは深まる。JBLのドライバーは使ったことがあっても、愛用者もたくさん知っている。しかし皆トゥイーターを足している。しばしウーハーとなつてみると、岡田さんはそれを見透かしたように説明してくれた。

「D1004の肝はドライバーの振動板です。初期の175はとても薄くて高域が伸びるんです。普通のドライバーとはイメージが違います。そしてネットワークのパーツにも贅を尽くしていますね」

システムはリンのネットワークプレーヤーにオクターブの真空管アンプ RE290なので、いつそうフレッシュな質感が前面に出たのかもしれない。

ここで岡田さんはアンプをウエスタンの KS-16608-L1に替えた。発売当時の組み合わせになる。ダイアナの声はモイスター成分が増えて、セクシなファイヤーがかった。ハイファイを追求するならオクターブだろうが、こつちもまたいい。にしても、声の微妙は表現力にまつたの曇りはない。

もしも最新モデルを含めて、大型スピーカーを探している人が見つけたら、即買いでしょうと話をしたら、いやもうすぐ売約になりましたときた。その方は JBL のフラッグシップを買ったつもりだったが、その計画を変更したという。

得意先	音元出版	品名	analog vol.50 P161	製品月日	842 CS4 MAR	作業原	原田	天地製版寸法	291 426	品質責任者	校正点検者
-----	------	----	--------------------	------	-------------	-----	----	--------	---------	-------	-------

得意先	音元出版	品名	analog vol.50 P160	製品月日	842 CS4 MAR	作業原	原田	天地製版寸法	291 426	品質責任者	校正点検者
-----	------	----	--------------------	------	-------------	-----	----	--------	---------	-------	-------